

提言

「中心発問」さえ外さなければ、道徳の授業になる！

2019.10 改訂 後藤 忠

学校では主に教科書などの**教材**を使って道徳の授業が行われる。

道徳教材の話の結末（話の終わり）は概ね次の2通りである。一つは**ハッピーエンド**の結末、もう一つは**ブルーエンド**（ブラックエンド）の結末である。（この他に、オープンエンドの結末もあるが、ここでは取り上げない。）

ハッピーエンドの教材には「2わのことり」や「はしの上のおおかみ」などがあり、ブルーエンドの教材には「きいろいベンチ」や「かぼちゃのつる」などがある。

児童・生徒は教材の登場人物に自己を重ね、教材に宿る道徳的価値に心を動かしながら、価値の理解（自覚）を深めていく。

その理解は、価値の大切さの理解に止まらない。道徳的価値は大切であることは分かるが、人間には弱さがあり、道徳的価値の実現は簡単にできるものでないことも理解する。さらに、価値が実現できたり、できなかったりした時の感じ方や受け止め方は人それぞれに違うことも理解する。

こうした理解（自覚）をより一層深めるきっかけを与えるのが「**発問**」である。

「発問」の曖昧な定義

道徳科の研修会が各所で盛んに行われている。

研修内容は以前に比べ「理屈より方法（指導法）」に重点を置いた具体的な研修が増えて実効性が高まった。

一方、研修が具体的になればなるほど、「講師によって言うことが違う。」「真逆のことを言う。」といった疑問や戸惑いも多く聞かれるようになった。

「〇〇発問」などの用語もそのひとつで、言葉の

定義が曖昧なまま使われている実態がある。

例えば、授業のねらいに深くかかわる中心的な発問、つまり**中心発問**のことを**主発問**と言ったりしているケースが目立つ。

主発問とは、授業全般における主な発問のこと、学習指導過程全般の発問を指す言葉である。

中心発問とは、「本時のねらい」に深く迫る発問を指す言葉である。

基本発問とは、中心発問が本時のねらいに深く迫り、効果の高い発問になるように中心発問の前後に配置する発問、つまり授業の布石となる発問である。

その他、**補助発問**とは、主発問で子供の感じ方や考え方が授業者の指導意図の通りに深まらなかったり、広がらなかったりした場合に備えて、予め用意しておく補助的な発問のことを言う。したがって、もし主発問で授業者の指導意図の通りの反応が子供から引き出せたならば使う必要のない発問、いわばいざという時の懐刀のような発問のことである。

「中心発問」の実態を考える

今学校現場では、主に次の2つが中心発問として設定されている。

Aタイプ

- ・ 登場人物の内面が大きく変化する場面。
 - ・ 登場人物が深く悩んだり、葛藤したりする場面。
 - ・ 子供から多様な考えや反応が出てくる場面。
- などのところを中心発問に設定している。

Bタイプ

登場人物の内面が本時のねらいとする道徳的価値の自覚で満ちている、それも最も深く、最も強く、

最もストレートに、最も純粋に満ちている場面を中心発問に設定している。

実際、学校ではAタイプとBタイプのどちらが多用されているだろうか？

私の感覚ではあるが、Aタイプが7割くらいを占めているように思える。(教科書の教師用指導書などの展開例を見るとその傾向が分かる。)

例えば「はしの上のおおかみ」でのAタイプは、「いつまでもくまの後ろ姿を見ているおおかみ」のところであり、「友の肖像画」では「ぼくの目からは涙があふれ、版画がかすんでしまった」というところである。(私が教員駆け出しの頃[昭和40年代]に先輩から教わった設定はAタイプだった。今のベテラン教師は、若い頃におそらくこうした指導を受けたことがあるのではないだろうか。)

しかし、改めて中心発問の役割を考えると、はたしてAタイプでよいか？という疑問が湧く。

中心発問は、発問の中で特に深く**本時のねらいに迫る発問**である。つまり主人公の内面が最もピュアに「本時のねらい」とする道徳的価値で満ちている状態を考える発問である。「はしの上のおおかみ」で言えば、おおかみが「小動物たちにやさしい気持ちで接するって本当に大切だな、意地悪するより親切にする方がずっと気持ちがいいな」と、一番強く、一番深く、一番純粋に思っている場面である。確かに「くまの後ろ姿を見ているおおかみ」の内面にも、「くまさん、カッコイイな。今度くまさんの真似をしたいな」という気持ちはあると思うが、「ウサギに悪いことをしたな、きつねに申し訳なかったな」といった気持ちもあるはずである。(「道徳科学習指導案作成(超)×3入門」レッスン⑤参照)

「友の肖像画」も同じで、和也が「正一を心から信頼し、これからも正一とずっと仲よく助け合い、励まし合っていこう」と最も強く、最も純粋に思っている場面が中心発問場面である。それは和也が「正一の作品を鑑賞しているところ」か、「帰りの電車の中でじっと目をつむっているところ」か、「電車の窓から見える青く透き通った空を見ているところ」であって、「ぼくの目からは涙があふれ、版画がかすんでしまったところ」ではないと思う。

したがって、中心発問は、いわゆる多様な考えが子供から出てくる発問ではなく、むしろ同じ傾向の似たような考えが、それも深く出てくるところということになる。

つまり、授業は「本時のねらい」の達成を目指して行うものだから、中心発問で多様な考えが拡散的に出てきたのでは、ねらいを達成するための授業にはならないことになる。

したがって、「中心発問」は授業者によって違ってよいということとはほとんどない。「ほとんどない」と言ったのは、教材の中にはまれに「友の肖像画」のように中心発問になりうるどころが複数存在する教材もあるからである。

ここで挙げた教材はほんの一部に過ぎず、実際にはもっとたくさんのよい教材が誤解によって主題のよさが生かされずに扱われているケースが多いと思われる。ぜひ、中心発問についての総検討をしていただきたい。

中心発問を検討する際の手掛かりにするのが「本時のねらい」である。「本時のねらい」が中心発問を決めるのである。しかし、その手掛かりとなる「本時のねらい」が抽象的で漠然として手掛かりとしての役には立たない。

つまり、「はしの上のおおかみ」で言うなら、「身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる」では、漠然としていて具体的な手掛かりとはならず、授業者が確信をもって中心発問を決めることは難しい。

そこで「本時のねらい」を登場人物に置き換えて**翻訳**することをお勧めしたい。

すなわち、本時のねらいを「(おおかみが) **身近にいるうさぎやきつねやたぬきたちに温かい心で接するって本当に大切だな、意地悪をするより親切にする方がずっと気持ちがいいな。よし、小動物たちにやさしく接し、進んで親切にしよう**」と翻訳し、おおかみがそのことを一番強く、一番深く、一番純粋に思っているところを探すということである。

基本発問には名脇役を充てる

名人と言われる人の授業は別として、中心発問だ

けで授業は成り立たない。

中心発問で「本時のねらい」に迫るためには、中心発問を支え、中心発問を冴え光らせる**基本発問**の役割は非常に重要である。(芝居に例えれば、中心発問が主役で、基本発問は脇役といえる)

例えば、先のAタイプで述べた「登場人物の心が大きく変化する、登場人物が深く悩んだり葛藤したりする、子供から多様な考えが表出される」などの発問は極めて有力な基本発問の候補といえる。

効果的な基本発問の設定によって、中心発問で質の高い学習が担保され、道徳的価値の自覚を一層深めることができるのである。

その意味で、基本発問は中心発問以上に授業の質を決定付ける重要な役割を担う発問とすることができる。しかも、授業時間を考えると基本発問の数はせいぜい2問程度に止めなければならない。

したがって、的を射た中心発問を決めるより、効果的な基本発問(いわゆる名脇役)を決める方が何倍も難しいといえる。

なお、基本発問の設定には、学級児童の実態や授業者の児童理解力、教職経験、人柄、性格などが反

映される。したがって、基本発問の設定は授業者によって異なる。勿論それでよいし、道徳の授業はむしろそうありたいと思う。そもそも、全学級が全く同じ学習指導過程で授業を行うなどありえない。

人からの無難な「借り物」発問より、荒削りだが授業者が自ら考え、力を込めて振り下ろす鈍のような発問の方が子供の心にはグンと響くし、何倍も意味がある。

設定した基本発問が効果的であったかどうかは、授業で子供が教えてくれる。子供の反応を鏡に更なる授業改善に努めればよい。これが授業力の向上に繋がる。

いずれにしても、**中心発問さえ外さなければ道徳の授業になる。**

道徳の授業の面白さは発問構成の面白さだと言える。自分で考えた発問で授業を行うと道徳授業は俄然面白くなる、そのことを是非実感していただきたい。

授業には完璧な授業などない。あるのはよりよい授業を求めることだけである。